



日本生態学会

No.25

2011年9月

# ニュースレター

## [目次]

日本生態学会第59回大会案内2.....1

### 記事

- I. 全国委員会承認事項..... 10
- II. 書評依頼図書..... 10
- III. 寄贈図書..... 10
- IV. 後援・協賛..... 10

書評..... 10

京都大学生態学研究センターニュース..... 15



## 日本生態学会第 59 回大会案内 -2

日本生態学会第 59 回大会（公式略称 ESJ59）は、東アジア生態学会連合第 5 回大会（公式略称 EAFES5）との合同大会として、大会実行委員会、大会企画委員会、EAFES5 実行委員会により、下記の要領で開催されます。この案内は、郵送される文書としては最終的なものですが、プログラムの内容などは随時更新されますので、最新情報は大会ホームページ（<http://www.esj.ne.jp/meeting/59/>）でご確認ください。

**ご注意** 日本生態学会会員は、ESJ59 と EAFES5 のいずれか一方の大会に参加申し込みをすることで、両大会の企画を視聴することができます。なお、ESJ59 と EAFES5 の参加費用は同一です。ただし、諸条件が異なっている場合がありますので、EAFES5 を通じて参加する場合には必ず EAFES5 のホームページをご確認下さい。

### 連絡先

〒 520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷 1-5  
龍谷大学理工学部 遊磨正秀 気付  
日本生態学会第 59 回大会（ESJ59）実行委員会  
大会会長：赤松徹真  
大会実行委員長：遊磨正秀  
電子メール [taikai@mail.esj.ne.jp](mailto:taikai@mail.esj.ne.jp)  
大会公式ホームページ <http://www.esj.ne.jp/meeting/59/>

本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページにある問い合わせページからお願いします。大会に関する最新情報は、ホームページでご確認ください。

### 大会の概要

本大会は龍谷大学 瀬田キャンパスを会場として 2012 年 3 月 17 日（土）から 21 日（水）に開かれ、公開講演会、シンポジウム、フォーラム、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、自由集会、総会、受賞講演会、懇親会を行います。主な日程は下記のとおりですが、シンポジウム、集会の数によって変更されることがあります。詳細はプログラム、公式ホームページで追ってお知らせしますので、ご確認ください。

3 月 17 日（土）各種委員会、公開講演会、企画集会、自由集会  
3 月 18 日（日）シンポジウム、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、自由集会  
3 月 19 日（月）シンポジウム、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、自由集会  
3 月 20 日（火）総会・授賞式、受賞講演、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、自由集会、懇親会  
3 月 21 日（水）シンポジウム、企画集会、フォーラム、自由集会

企画集会、自由集会につきましては、「**企画集会と自由集会**」をご覧ください。

大会参加、一般講演、企画集会、自由集会の申し込みは、大会公式ホームページを通じて行って下さい。詳細については、申し込みの流れの項を参照ください。

EAFES5 では、シンポジウムと一般講演（ポスターのみ）を行います。ESJ59 に参加される方は、EAFES5 にも参加できますが、**両大会に重複して講演することはできません。**

## 注意事項一【重要】：講演要旨集の別料金化

大会参加費の軽減化、紙資源の節約などの理由から、今大会でも、講演要旨集の料金は参加費とは別扱いになります。講演要旨集の購入を希望される方は、参加申込みの際に「講演要旨集の購入」についてもあわせて申し込んでください（一般会員：3,000円、学生会員：2,000円）。

なお講演要旨集は、大会ホームページでpdfで公開いたします。またHTML版講演要旨は、日本生態学会第59回大会（<http://www.esj.ne.jp/meeting/59/>）のサイトからいつでも自由にご覧いただけます。大会プログラムに掲載されているQRコードから、インターネット接続機能を持った携帯電話等でご覧頂くことも可能です。

講演要旨集の冊子は当日販売も行いますが、数に限りがありますので、先着順の限定販売とさせていただきます。講演要旨集が必要な方は、是非、事前購入していただくようお願いいたします。

講演要旨集の別料金化は、紙資源の節約、大会参加費の軽減などを目的としたものであることを重ねてご理解ください。

## 参加資格と申し込みの流れ

### 1) ESJ59に参加するには

- ・ESJ59で講演やポスター発表を行ったり各種集会の企画をしたりするには、日本生態学会会員である必要があります。「会員」とは、すでに入会して2011年の会費を納めている方と、2012年の会費を納めて新たに入会される方を指します。集会によって必要な会員資格が異なりますので、詳しくは「ESJ59企画集会と自由集会」をご覧ください。
- ・非会員の方で、大会での発表や企画申し込みを希望される方は、事前に、「2) 生態学会に入会するには」にしたがって、生態学会に入会してください。入会するには2012年の会費を前納しなければなりません。また、大会に参加するには、これとは別に参加費を払う必要があります。
- ・入会手続きを終了していない方、会員であっても2011年の学会費が未納の方は、大会での発表や各種集会の企画はできません。また、大会で発表するには発表時まで2012年の学会費を納入しておく必要があります。
- ・ESJ59に聴衆として参加するには、日本生態学会会員である必要はありません。非会員で大会に参加されたい方は、「4) 大会参加申込」をご参照の上、大会参加申込と参加費納入をお願いいたします。
- ・ESJ59はEAFES5と合同で開催されますので、日本生態学会、韓国生態学会、中国生態学会、台湾亜熱帯生態学会、東アジア長期生態研究ネットワーク（EAP-LTER）のいずれかの会員としてEAFES5に参加される方は、ESJ59にも参加できます。ただし、ESJ59とEAFES5で重複して集会の企画をしたり講演（口頭・ポスター）を行ったりすることはできません。

### 2) 生態学会に入会するには

- ・入会手続きについては日本生態学会のホームページ（<http://www.esj.ne.jp/>）をご覧ください。
- ・学会費納入の確認までには、5日間程度かかることがありますので、余裕を持って手続きを行ってください。また、入金控えは大会まで必ず保管し、大会受付にご持参ください。

入会に関する問合せ先（大会に関する問合せには対応できません）

〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8

日本生態学会事務局 TEL&FAX: 075-384-0250

### 3) 各種集会の企画提案

- ・シンポジウムの企画提案はすでに締め切られています。
- ・企画集会、自由集会、ESJ59フォーラムについては、「ESJ59企画集会と自由集会」「ESJ59フォーラム」をお

読みの上、企画をご提案ください。

- ・シンポジウム、企画集会、自由集会、ESJ59 フォーラムの講演は、企画者が一括して申し込みますので、個別の講演者が講演申込をする必要はありません。ただし、シンポジウムと企画集会の講演者が講演要旨を登録するには、「4) 大会参加申し込み」を済ませ、大会登録番号を取得しておく必要があります。
- ・今大会は EAFES5 との合同大会ですので、シンポジウム、企画集会での発表は、できる限り英語で行い、日本語で行う場合は、図や表に貼り付ける文字を英語にし、主要な専門用語は英語併記とするなどの対応をお願いします。

#### 4) 大会参加申込

- ・大会参加申込は、大会公式ページ (<http://www.esj.ne.jp/meeting/59/>) からお願いします。受付開始は 10 月はじめの予定です。
- ・非会員の方は、大会公式ページから参加申込するさいに、「非会員」を選択してください。
- ・一般講演を希望する会員は、登壇者（ポスター発表の場合は主たる説明者）が参加申込と合わせて講演申込を行ってください。
- ・シンポジウム・企画集会の講演は、企画者がまとめて申し込みますので、各講演者は大会参加申込のみを行ってください。参加申込をしないと講演要旨の登録ができませんのでご注意ください。
- ・大会講演要旨集の購入を希望される方は、要旨集購入希望欄にチェックをお願いします。
- ・登録が完了すると大会登録番号が発行されます。この番号は参加費など諸経費の振り込み、要旨の登録、各種問い合わせ、確認メールの再発行などで必要となります。登録時にご自分で設定するパスワードと合わせて、注意して管理してください。

#### 5) 大会プログラム

- ・大会プログラムは 2012 年 2 月頃に大会公式ホームページで公開され、どなたでもご覧になれます。
- ・大会プログラム冊子は、同じく 2012 年 2 月頃に日本生態学会員全員に郵送されます。ただし、学会費未納の場合はその限りではありませんので、プログラムの郵送を希望される会員は、必ず 2011 年内に 2012 年の学会費を納入してください。
- ・非会員には、大会プログラム冊子は大会当日、会場受付でお渡しします。

#### 申し込みなどの締め切り

各種申し込みの締め切りは以下の通りです。

|                |                          |
|----------------|--------------------------|
| 企画集会、自由集会申し込み： | 2011 年 10 月 20 日（木）17:00 |
| 一般講演申し込み：      | 2011 年 11 月 10 日（木）17:00 |
| 講演要旨登録：        | 2012 年 1 月 12 日（木）17:00  |
| プレゼンファイル登録：    | 大会の数日前                   |

各種申し込みは、締め切りの 1 ヶ月前程度から受け付ける予定です。これらのスケジュールに変更がある場合もありますので、適宜、大会ホームページでご確認ください。

#### 諸経費の金額と支払い方法

学会費（詳細は <http://www.esj.ne.jp/office/member/guide.html> を参照）

2012 年 1 月 11 日（水）まで：非会員 2012 年学会費  
既会員 2011 年学会費

大会参加費（講演要旨集の代金を含みません）

|                  |               |        |
|------------------|---------------|--------|
| 2012年1月11日（水）まで： | 一般（会員・非会員とも）  | 8,000円 |
|                  | 学生（会員・非会員とも）  | 5,000円 |
| 大会当日             | ：一般（会員・非会員とも） | 9,000円 |
|                  | 学生（会員・非会員とも）  | 6,000円 |

講演要旨集代金（冊子体）

|           |    |        |
|-----------|----|--------|
| 一般 会員・非会員 | とも | 3,000円 |
| 学生 会員・非会員 | とも | 2,000円 |

懇親会費

|              |        |
|--------------|--------|
| 一般（会員・非会員とも） | 7,000円 |
| 学生（会員・非会員とも） | 5,000円 |

懇親会費には事前登録の割引制度はありません。ご理解下さい。

講演要旨集のみ 3,000円（大会終了後に送付します。事前にご連絡ください）

- ・会員とは、すでに入会し2011年の会費を納めた方と、2012年に新たに入会される方を指します。前年中（2011年1月～12月）に入会申し込みを行い、2012年1月から会員となる「次年入会」も受け付けます。「次年入会」の方も「会員」として扱われます。
- ・学会費と大会参加費は納入先が異なります。混同しないようご注意ください。
- ・日本生態学会の会員手続きにおいて「定収入のない若手会員」の参加費、懇親会費は「学生」として扱えるよう準備しています。しかしながら、学会費申請締切日と大会参加申込締切日の間に余裕がありません。すでに「定収入のない若手会員（2012年）」と認められた方はその旨を明記して大会参加申込してください。手続き中の方は「一般会員」として参加登録し、参加費、懇親会費とも「一般」の金額をお支払いください。大会会場でその差額を返金する予定です。返金手続きについては改めて連絡します。

#### 学会費を除く諸経費の支払方法

「参加申し込み」を終えた後、大会公式ページ（<http://www.esj.ne.jp/meeting/59/>）にリンクする支払いシステム（JTB）で、諸経費支払方法の選択を行ってください。この際、大会登録番号が必要になります。支払方法は（1）クレジットカード決済、（2）コンビニエンスストア店頭払い、（3）銀行振り込み、の何れかを選んでください。（1）の場合はこのシステム画面で支払手続きを完了できます。（2）と（3）の場合は支払方法の選択を行った後に、コンビニエンスストアあるいは銀行にて支払をしてください。詳しくはJTBのシステムの画面の案内をご参照ください。

**ご注意** 大会参加費の前納金額は、2012年1月11日（水）までに支払手続きを完了した場合に適用されます。これ以降に手続された場合は当日払いの金額となりますのでご注意ください。

#### ESJ59 企画集会と自由集会

第59回大会では、下記の要領で、企画集会と自由集会を募集します。企画集会と自由集会は一括して募集され、受付後に企画者の希望を考慮し、大会企画委員会によって企画集会と自由集会に割り振られます。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込みください。

## 企画集会

- ・企画集会には、大会参加費を支払った人に限って参加できます。
- ・企画集会の個別の講演の要旨は、講演要旨集に掲載されます。全体の趣旨説明と概要もプログラムと講演要旨集に掲載されます。
- ・企画集会の企画者・講演者がシンポジウム及び他の企画集会の企画者・講演者となることは認められません。
- ・企画集会の企画者・講演者は一般講演をできる限りご遠慮ください。一般講演との重複発表があっても、原則として日程の調整は行いません。限られた場所と時間を分け合って使うことへのご理解とご協力をお願いいたします。

## 自由集会

- ・自由集会は、新しい分野の立ち上げを助け、生態学の枠組みからはみ出す話題についても自由に議論できる場として、生態学会が伝統的に重視してきた集会です。しかしあくまでも関連集会であって、大会の正式行事ではありませんので、自由集会のみの参加者は大会参加者とはみなされません。
- ・自由集会では、全体の趣旨説明と概要のみがプログラムと講演要旨集に掲載され、個別の講演の要旨は掲載されません。
- ・一般講演、シンポジウムなどとの**重複発表は認められます**が、原則として日程の調整は行いません。
- ・シンポジウムおよび企画集会の企画者・講演者は自由集会の企画を可能なかぎりご遠慮いただき、限られた場所と時間を分け合って使うことへのご理解とご協力をお願いいたします。

企画集会、自由集会ともに、企画者は日本生態学会会員（A、B、C会員のいずれか）である必要があります。さらに、企画集会での講演者（登壇者）はA/B会員に限定されます（大会実行委員会が特別に認めた場合を除く）。

企画集会または自由集会の開催を希望される方は、2011年10月20日（木）17:00までに大会公式ホームページからお申し込みください。

いずれの集会についても、大会企画委員会は内容に関与しませんが、概要などに特定の個人を傷つける内容を含むと判断されるものについては、その限りではありません。

企画集会、自由集会とも開催時間は約2時間の予定です。

企画集会、および自由集会には、3月17日（土）～21日（水）を充てる予定です。なお、自由集会の時間枠は、大会初日の各種委員会や全国委員会と並行した時間帯等に設定される可能性が高くなります。

提案された企画集会・自由集会の数が会場の収容可能数を上まわる場合には、同一会員が重複して複数の集会の企画者となっている提案からご遠慮いただきます。次に、大会シンポジウム企画者による企画集会・自由集会にご遠慮いただきます。それでも数が多い場合には、自由集会は抽選によって採否を決定します。

開催の可否については、11月18日（金）までに企画者にメールでご連絡します。

今大会はEAFES5との合同大会ですので、企画集会での発表はできる限り英語で行い、日本語で行う場合は、図や表に貼り付ける文字を英語にし、主要な専門用語は英語併記とするなどの対応をお願いします。

## ESJ59 フォーラム

学会内の各種委員会等によって企画されるフォーラムを数件開催する予定です。フォーラムとは、各種委員会から提案され、生態学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。なお、フォーラムの企画やフォーラムでの話題提供は、**重複講演制限の対象となりません**。

## ESJ59 一般講演

一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申し込み時に希望（口頭発表かポスター発表）をお聞きますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。

今大会は EAFES5 との合同大会ですので日本語を解さない参加者との交流を図るために一般講演（口頭・ポスター）をできる限り英語で行い、日本語で行う場合は図や表に貼り付ける文字を英語にし、主要な専門用語は英語併記とするなどの対応をお願いします。ただし英語での口頭発表の申し込み数によっては分野にこだわらずに英語での発表を集めたセッションに回っていただく場合があります。

発表内容に応じて会場・時間の割り振りやポスター賞のグループ分けを行うため、発表申し込み時に適切な分野を選んでいただきます。一般講演申込のフォームに選択可能な分野一覧が示されます。人数や会場の制約のため、希望された分野で発表できない可能性があります。以下は発表申込のときに示される発表分野（候補）の一覧です。

群落／植物個体群／植物生理生態／植物繁殖／植物生活史／送粉／種子散布／菌類／微生物／景観／遷移・更新／フェノロジー／動物と植物の相互関係／進化／種多様性／数理／動物群集／動物繁殖／動物個体群／動物生活史／行動／動物の社会性／分子／古生態／保全／生態系管理／外来種／都市／物質生産／物質循環／生態学教育・普及／英語（分野は不問）

#### 注意：

- ・一般講演の演者（登壇者及び主たる説明者）は、日本生態学会 A 会員と B 会員に限ります（共同発表者は会員である必要はありません）。
- ・一人で二つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
- ・さらに、シンポジウムの企画者・講演者は、一般講演は行えません（口頭・ポスターとも）。

これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご理解ください。

## 口頭発表の方法

口頭発表は、会場備え付けの機器を使用したマイクロソフト・パワーポイントあるいは PDF による発表とします。持ち込みのコンピューターは使用できません。発表用ファイルの登録方法などは現在検討中ですが、登録締め切りは大会開始の数日前となる予定です。詳細は、大会ホームページで追ってご案内します。

## EAFES5 一般講演

EAFES5 の一般講演はポスター発表のみです。

## ポスター発表の方法

ポスターボードは縦長（90 cm × 210 cm）のものを使用する予定です。ポスター発表は、大会期間中に 3 部に分けて行う予定です。3 部を合計して約 1,200 件のポスター発表を収容できる予定です。ポスター発表の申し込み数が収容可能数を超えた場合は、一部の方に、口頭発表への変更をお願いすることがあります。

## ポスター賞

若手研究者の研究活動を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。EAFES5 と合同で開催される ESJ59 では、学会員の英語使用の推進と、海外からの参加者との交流の促進を目的として、ポスター賞も EAFES5 と合同で運営することになりました（EAFES5-ESJ59 Poster Award）。

ポスター賞の審査対象は、ポスター賞に応募した発表に限られ、ポスターは英語で作成していただくとともに、英語での発表が求められます。合同ポスター賞の受賞者のうち、日本生態学会の会員は、日本生態学会ポスター賞の受賞者として学会の公式記録に残ります。応募資格及び審査の概要は、下記をご参照ください。ポスター発表に関する詳細は大会プログラムに掲載しますので、ポスターを準備するときの参考にしてください。



## ポスター賞応募資格について

第 59 回大会では、応募資格制限を強め、主たる発表者のポスター賞応募資格について以下の条件を設けます。

ポスター賞に応募できるのは、一般講演申し込み締め切り期限（2011 年 11 月 10 日）の時点で博士号未取得の若手会員（学部学生、大学院生、研究生）とします。また、今回の合同ポスター賞では、以前の日本生態学会大会におけるポスター賞受賞者の応募を認めます。

応募制限は前々回の東京大会から導入しました。近年応募者が急増し、ポスター賞の審査に要する負担が著しく高まったことが理由の一つです。東京大会、札幌大会では、それぞれ 538、504 件のポスター賞応募があり、ともに約 130 名の方に審査員を引き受けていただきました。審査員の選定作業には、大変な手間と時間を費やしてきました。また、審査員の方々は、大会参加費を払っているにも関わらず、審査時間の捻出に協力してくれています。繰り返し審査員を引き受けていただいている方も多数おられます。そのため、審査に関する負担軽減のための応募制限は必須のものと考えております。

一方で、若手研究者の関心がポスター発表に集中し、口頭発表の経験を積む機会が減っているのも事実です。若手研究者には、ポスター発表の次には是非、口頭発表の技術も習得し、さらには英語での発表にも積極的にチャレンジしてほしいと思います。そして何よりも、学会発表した研究を学術論文として公表するよう全力を尽くして下さい。ポスター発表を踏み台にして、研究者としてのステップを高めていければ、本当の意味でポスター賞が機能していることになるでしょう。応募制限の強化には、若手研究者へのこのような期待も込められていることを理解していただければ幸いです。

## 英語ポスターの作成と発表および審査の概要

ポスター賞への応募は英語で作成されたポスターに限ります。これは今大会の試験的措置ではありますが、大会での英語使用の拡大を方針とする日本生態学会の新しい取り組みとして、前回大会（ESJ58 札幌大会）の総会で承認されました。英語に不慣れな若手会員、特に学部学生や修士学生のなかには、英語発表を義務とするポスター賞への応募を躊躇される方が多数いらっしゃると思いますが、審査では口頭説明時の英語能力を評価しませんので、奮ってご応募いただきたいと思います。今大会の英語ポスターの発表をきっかけとして、たくさんの若手研究者が国際学会での成果発表や国際誌への論文投稿に意欲的に取り組み、世界を舞台に挑戦し活躍されることを期待します。

ポスター賞の審査では、研究の質を評価するうえで、口頭説明を聞いたり、質疑応答を必要とする場合があります。英語使用を促進するため、発表コアタイム中は聴衆が日本人であっても英語で説明していただきます。審査において英語の能力を評価することはありませんが、研究内容を分かりやすく伝える能力（情報伝達能力）と研究の質に加えて、発表への姿勢や聴衆への気配りを採点します。つまり演者が聴衆全体に対し大きな声で丁寧な説明を心がけているか、評価します。審査基準の詳細については、大会公式 Web ページ「ポスター賞について ([http://www.esj.ne.jp/meeting/poster\\_prize/about.html](http://www.esj.ne.jp/meeting/poster_prize/about.html))」をご覧ください。

## ポスター賞の副賞について

英国王立科学協会出版のご厚意により、特に優れたポスター発表を行った 5 名の若手研究者に対し、英国王立科学協会が発刊する学術誌（オンライン版）の無料購読権が贈呈されます。そこで、3 日間のポスター講演期間全体を通じて、特に評価の高かった発表を 5 題選び、特別最優秀ポスター（The Most Outstanding Poster Award）として表彰し、副賞としてこのオンライン版購読権を授与させていただきます。受賞者は、英国王立科学協会が発刊する学術雑誌 3 誌（Philosophical Transaction B 誌、Proceedings B 誌、Biology Letters 誌）のなかから希望す

る雑誌を1つ選ぶことができ、1年間、オンライン版の無料購読が許されます。なお、特別最優秀ポスター賞はEAFES5-ESJ59 合同大会の実行委員会・大会企画委員会より送られる今大会限定の特別賞ですので、日本生態学会公認の賞には相当しません。したがって、日本生態学会会員がこの賞を受賞しても、本学会の公式記録には残りません。

## 高校生ポスター発表「みんなのジュニア生態学」募集

第59回大会では、札幌大会に準じて高校生のポスター発表会「みんなのジュニア生態学」を開催します。

大会会期中に高校生にポスター発表をしていただき、生態学に関連する諸分野の研究者や学生との交流を通して、生態学全般への関心をもつていただくのが本企画のねらいです。生き物の生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも大歓迎です。

【日時】2012年3月20日（火）13時～15時30分、成績発表・表彰式（16時30分～17時00分）

【会場】龍谷大学瀬田キャンパス ポスター会場

【参加費】無料。発表者の全員（人数に制限なし）および付き添いの教員1名は、大会参加費が免除されます。

【発表資格】原則として、高等学校または高等学校に相当する教育機関に在籍する生徒であること。国籍は問いません。

【発表内容】生態や環境に関わる生物学の内容であれば、なんでも受け付けます。研究成果でなくても、諸活動の計画、現状、または問題点などの中間報告でも結構です。

【発表方法】本大会の指定するポスターボード（横90cm×縦210cm）に納まるポスターであること。発表者（複数可）は、発表時間帯にポスターの説明を口頭で行ってください。

【審査員】ポスター1件につき複数名の審査員が配置され、質問やコメント、アドバイスをします。

【ポスター賞】選考委員会が内容を評価し、発表されたポスターは 最優秀賞／優秀賞／審査員特別賞／敢闘賞などとして表彰します。

### ■高校生のポスター発表会「みんなのジュニア生態学」の申込み手順

2011年12月2日（金）までに電子メールで件名に『みんなのジュニア生態学』と記入して、下記の内容(1)～(6)を以下のメールアドレスに送ってください。なお発表希望申し込み数が非常に多い場合には、申し込み先着順で打ち切る可能性もあります。早めのお申し込みをよろしくお願いいたします。

発表要旨（日本語で500字以内）は、2012年1月6日（金）までに電子メールで件名に『みんなのジュニア生態学発表要旨』と記入して、メール本文に貼り付けて以下のメールアドレスに送ってください。文字化けの原因となる文字（囲み数字、囲みアルファベット、外字）が含まれていないかを送信前に確認してください。

- (1) ポスター発表のタイトル
- (2) 発表者全員（共同研究者を含む）の氏名、よみがな
- (3) 代表者（または引率教員）の所属
- (4) 付き添いの教員の有無
- (5) 代表者（または引率教員）の連絡先（学校または自宅を明示）：郵便番号／住所／電話番号
- (6) 代表者（または引率教員）のメールアドレス（携帯電話のアドレスは不可）

#### 【送付先／お問合せ先】

大会実行委員会・高校生ポスター発表担当 中島久男

〒525-8577 草津市野路東 1-1-1

立命館大学・理工学部・物理科学科

電話 077-561-2714、FAX 077-561-2657

E-mail: nakajima@se.ritsumei.ac.jp

## 公開講演会「生物間相互作用が作り出す生物多様性」

生物多様性について考えるためには、生き物どうしの複雑な関係をとらえる必要があります。このテーマに関する公開講演会を以下の日程と予定で行います。

### 日本生態学会第15回公開講演会「生物間相互作用が作り出す生物多様性」

場所：龍谷大学 瀬田キャンパス

日時：2012年3月17日（土）13:00～16:30

プログラム：

開会のあいさつ：松田裕之（生態学会会長）

講演：川北篤（京都大学）、岸田治（北海道大学）、工藤岳（北海道大学）、奥田昇（京都大学）、  
椿宜高（京都大学）

司会：陀安一郎（京都大学）

## 懇親会

2012年3月20日（火）19時から、リーガロイヤルホテル京都で懇親会をおこないます。懇親会会場は、JR京都駅から歩いて7分のところにあります。たくさんの方々のご参加をお待ちしております。なお、会場のスペースに限りがありますので、参加者が先着順で900名となりましたら、締め切らせていただきます。どうぞご了承ください。

## 託児所

これまでの大会と同様に、大会会場の龍谷大学キャンパス内に託児室を設置する予定です。開設時間や申し込み方法などの詳細は、大会ホームページで追ってご案内します。

## エコカップ2012

大会サテライト企画として、2012年3月22日（木）に「京都府立体育館」で、親善フットサル大会エコカップ2012が開催されます。主催はエコカップ2012実行委員会です。詳細はホームページ（<https://sites.google.com/site/ecocup2012/home/>）でご確認ください。

## 宿泊・交通案内

大会会場（龍谷大学瀬田キャンパス）へは公共交通機関をご利用ください。最寄の駅はJR琵琶湖線瀬田駅で、JR京都駅より約20分です（新快速は停車しません）。瀬田駅と龍谷大学瀬田キャンパスの間は帝産バスが運行（所要約10分、料金210円）しており、朝夕は臨時増便の予定です。なお特別の事情により、大会会場（龍谷大学瀬田キャンパス）へ車にての来構を希望される方はあらかじめ大会事務局にお問い合わせください。

大会中の宿泊は各自での手配をお願いします。大会会場に近いJR瀬田駅をはじめ、JR琵琶湖線沿いの石山駅、大津駅、草津駅、山科駅や京都駅周辺などが便利です。

会期中の昼の食堂や軽食等の購買については、大学生協等のご厚意により曜日・祝日にかかわらず提供いただけることとなっています。

## ご意見

大会企画委員会では、大会運営についてのご意見を随時受け付けています。大会公式ホームページにある問い合わせページからお寄せください。

## 記 事

### I. 全国委員会承認事項

次期幹事長（任期：2013.1.1～2014.3.31）

陶山 佳久（東北大学大学院農学研究科）

### II. 書評依頼図書（2011年2月～2011年8月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 日本魚類学会自然保護委員会編「絶体絶命の淡水魚イタセンパラ」(2011) 268pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-01878-0
2. 伊吾田宏正・上田剛平・鈴木正嗣・山本俊昭・吉田剛司監訳「野生動物と社会—人間事象からの科学—」(2011) 366pp. 文永堂出版 ISBN:978-4-8300-3231-8
3. 大越健嗣・大越和加「海のブラックバス サキグロタマツメタ 外来生物の生物学と水産学」(2011) 244pp. 恒星社厚生閣 ISBN:978-4-7699-1234-7
4. 日本生態学会編 大園享司・鏡味麻衣子担当編集「現代の生態学 11 微生物の生態学」(2011) 270pp. 共立出版(株) ISBN:978-4-320-05739-5
5. 滋賀県立琵琶湖博物館編「生命の湖 琵琶湖をさぐる」(2011) 224pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-1191-4
6. 向井文雄編著「基礎生物学テキストシリーズ 9 生物統計学」(2011) 206pp. 化学同人 ISBN:978-4-7598-1109-4
7. 徳田龍弘著「北海道葉虫類・両生類ハンディ図鑑」(2011) 96pp. 北海道新聞社 ISBN:978-4-89453-592-3
8. 加藤雅啓・海老原淳編「日本の固有植物」(2011) 506pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4486-018971
9. 小寺祐二「イノシシを獲る ワナのかけ方から肉の販売まで」(2011) 136pp. 農文協 ISBN:978-4-540-09256-5
10. 中坊徹次監訳「知られざる動物の世界 2 原始的な魚のなにか」(2011) 116pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-17762-6
11. 湯本貴和・須賀丈編著「信州の草原 その歴史を探る」(2011) 178pp. ほおずき書籍 ISBN:978-4-434-15541-3
12. 多田満著「レイチェル・カーソンに学ぶ環境問題」(2011) 192pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-062220-2
13. 日本直翅類学会監修 村岡貴史・伊藤ふくお著「バッタ・コオロギ・キリギリス生態図鑑」(2011) 452pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-1394-3
14. 大西文秀著「環境容量からみた日本の未来可能性」(2011) 184pp. 大阪公立大学共同出版会 ISBN:978-4-901409-83-4

### III. 寄贈図書

1. 「第26回 国際生物学賞—記録—」(2011) 32pp. 独立行政法人日本学術振興会国政生物学賞委員会
2. 「Strix Journal of Field Ornithology VOL.27」(2011) 178pp. 公益財団法人日本野鳥の会
3. 「うみうし通信 No.71」(2011) 12pp. 財団法人水産無脊椎動物研究所
4. 「長野県生物多様性概況報告書」(2011) 88pp. 長野県環境保全研究所
5. 「果樹研究所ニュース 27」(2011) 8pp. 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所
6. 「食と緑の科学第65号」(2011) 186pp. 千葉大学大学院園芸学研究科

### IV. 後援・協賛

日本生態学会では、下記のシンポジウム・セミナーを後援・協賛しました。

1. 2011年度コスモスセミナー自然観察教室「集まれ昆虫好きな子供たち2011」  
期日：2011年8月2日～4日  
会場：関西学園都市・清滝・室池地区「アイ・アイ・ランド」

## 書 評

山岸哲編著（2009）「日本の希少鳥類を守る」京都大学学術出版会 364pp. ISBN: 9784876987771

主要部(第1部)12の章で扱われる種は、登場順にトキ、アホウドリ、ヤンバルクイナ、シマフクロウ、シジュウカラガン、ライチョウ、オオワシ、オオタカ、チョウゲンボウ、ブッポウソウ、タンチョウおよびコウノトリで、その種だけで単行本数冊が刊行されるような人気種でもある。各章各1種の時にボックス(用語解説)を伴った総説となり、それぞれ引用文献が明示される。各本文内容で共通しているのは、希少化してしまった原因・経緯とそれに対処するために具体的に実施された生息域外保全・再導入の具体例が詳述される。種によっては、密猟、外来種、狩猟に起因した鉛中毒、農薬など汚染物質、混獲や農地などでの事故、一局集中化と感染症・近親交配、地球温暖化、食料自給、石油あるいは新たなエネルギー資源(風力)の開発、バードストライク、エコツーリズムなど保護に伴う地域産業の振興、環境教育、人工給餌の功罪など様々な側面が扱われていたが、これらは野鳥に限らず多くの野生動物・自然生態系、あるいは日本社会が直面している問題とも重なり、この点は、鳥類をモデルにした保全生態学の実践参考書としても活用出来る。また、いずれの章末にもコラムが附記され、各章の当該鳥種とは別種だが(たとえば「新生息地による保護」(p48-)、「国際連携」(p128-)、「保護管理」(p252-)、「農林業変化」(p307-)でコアジサシ、シマアオジ、サシバ、カワウ、イヌワシなど)、問題という側面で関連し、考察に広がりを与えた。

「はじめに」で、編著者・山岸 哲氏が主張されるように「臨床」を標榜されるなら、大学はその拠点と成る「病院」に相当するのだろうか、コウノトリの兵庫県立大、ヤンバルクイナの琉球大、アホウドリの東邦大など、研究室単位以上が保護活動や研究に従事するケースが、日本にも多数有り、頼もしく感じた。が、各地の大学に散らばる鳥好き学生にとっては、孤軍奮闘の道しかない。だが、どうか安心して欲しい。第2部「鳥類保全のためのデータブック」冒頭 (p313) で主張されたように、たとえ鳥類を教える (研究で、実際に扱っている) 教員が不在でも、およそ生物学の分野を学べることが出来るなら、鳥類保全生態学は展開可能という言葉は、力強く響くのではないか。その手助けとして、この部には (保護の歴史・行政、取り組みを含む保全生物学、絶滅、動物園の役割、野生種との共存などの) 参考書あるいはネットサイトのリストが完備され、希少 46 種ごとの保護活動へ参加の具体的な方法 (調査研究、資金協力など含め) が一覧表で提示されていた。また、保全に関する法制度と保全施策概要 (p329-) は、将来、職域 (プロ) として関わりたい学生は必読で、コンパクトにまとめられている点は大変ありがたい。なお、チェルノブイリの被爆 (p22) や (大津波の影響下にあったという) ミッドウェイ環礁のコアホウドリ (p33) のことなど、3/11 震災前は、何処か遠い場所の事として読み飛ばしたが、本原稿を作成するにあたり、震災後 2 ヶ月が経過した今、再読、日本の鳥類学者に求められる関連の新たな課題が浮き彫りになりそうだ。となることが予感された。ただ一点、感染症に関わる記述が、本書に散見していたが (コラムでもこの題名のトピックもある)、感染あるいは病原体を一括りにして、あたかもブラックボックスのように扱われていたのが、とても残念というか危険な印象があった。非生物であるウイルス含め、病原体もまた生物進化の産物であり、多様である。また、その表現型の一つである疾病 (すなわち感染症) もまた多様である (すなわち、鳥類個体群自身のほか、ヒト・家畜家禽などに与える影響も様々ということ)。さらに、外来種が加わり宿主である鳥類と病原体・寄生体の組み合わせも途轍もなく曇茶羅化している現状では、病原体の素顔も出来る限り捉えておくことが、肝要と病原体屋サイドの野次である。ご一考を。

(酪農学園大学 獣医学部 感染・病理教育群 浅川満彦)

池田和信編 (2010) 「日本列島の野生生物と人」 332pp.  
世界思想社 ISBN: 978-4-7907-1471-2

近年日本で問題になっている獣害問題やシカの植生への影響などに興味があり、本書を手にとった。本書は生態学・遺伝学などの自然科学と地理学・考古学・民俗学・文化人類学などの人文科学の研究者による 14 の章からなる (序章と巻末の座談会を含める)。「おわりに」によると、本書は 1998 年から続く総合研究大学院大学 (総研大) の共同研究の成果の一部だという。その研究会は総研大の理念を具現化した文理融合を目指したもので、学外から幅広い分野の研究者が参加しており、本書の著

者 17 人のうち、総研大所属なのは 4 名だけである。この研究会の成果はすでに 2 冊の本として出版されているらしいが、それらを踏まえた本書の位置づけは書かれていなかった。

各章の表題と著者は以下のとおりである。

- 序章 日本列島における野生生物と人 (池谷和信)
- 第 1 章 DNA からみた生物の進化 (長谷川政美・米澤隆弘)
- 第 2 章 考古学からみた人・動物関係史 (松井章)
- 第 3 章 環境民俗学からみた人びとの暮らし (篠原徹)
- 第 4 章 世界の中での日本の森と里山 (大澤雅彦)
- 第 5 章 九州山地の植物利用 - 椎葉村の植物誌 (内海泰弘)
- 第 6 章 照葉樹林における森林の商業的利用 - 沖縄やんばるの事例 (増野高司)
- 第 7 章 「シカの生態系破壊」から見た日本の動物と森と人 (揚妻直樹)
- 第 8 章 歴史的な自然としての海洋 - 日本近海 of 海獣類と猟業史 (宇仁義和)
- 第 9 章 回遊魚の利用をめぐる環境史 - 対馬暖流域において (橋村修)
- 第 10 章 人間社会とイノシシー - 西日本における変化と獣害 (小寺祐二)
- 第 11 章 希少動物の現状と保護政策 - 沖縄島北部を中心として (澤志泰正)
- 第 12 章 野生絶滅したトキの復活 (山岸哲)
- 座談会 人間が関与した自然を考える (秋篠宮文仁・湯浅浩史・林良博・長谷川政美・池谷和信)

一見して、本書の学際性だけでなく、題材の多様性が明らかである。野生動物による農業被害や「生態系破壊」だけでなく人間が引き起こしたと思われる生物の絶滅も扱い、これら生物と人間の間の非対称な関係性だけでなく、伝統的な植物利用のような調和的な関係性も扱う。対象とする生態系は北海道から沖縄までの陸上だけでなく海洋も含み、対象分類群も哺乳類を中心としながら魚類・鳥類・植物まで含む。野生生物と人の関係のあり方が、かくも多様であることに今さらながら驚く。野生生物と人の関係にどのような問題があるのかを具体的に知ることができる良書である。巻末資料の文献案内もさらに進んで勉強するのに便利である。

ただし、扱う時間スケールについては、哺乳類 (真獣類) の進化の起きた 1 億年前からを扱う第 1 章と、更新世から近世にかけての動物化石を扱う第 2 章を除くと、戦前さらには江戸時代以前にまでさかのぼった言及は少ない。利用できる史料がほとんど残っていないため、やむを得ないことなのだろう。今何をなすべきかは歴史から学ぶ必要があると思われるので、化石や花粉分析などによる過去の生物相や環境の復元、生物の遺伝解析による生物の過去の移動経路の推定などで、生態学を含めた自然科学が貢献できる余地がまだまだあると思われる。

野生生物と人間の多様な関係を、自然科学・人文科学のさまざまな角度から見ることができるのが本書の特色だが、「はじめに」で書かれている「自然科学と人文科学を統合しようとしている点では類書がみあたらない」

という自己評価が的確かどうかは評価が分かれそうだ。たしかに各章とも「生物の生態、人の歴史と民俗、人の政治経済という側面のいずれかに力点があるとはいえ、3者を統合しよう」としているし、本書全体でも序章で各章の位置づけを論じ、巻末に座談会を置くなどの努力がされている。だが、各章は異なる立場から多様な主題について論じているため、本書全体で各章をつなぎあわせても、得られる全体像は断片化している。もし文理融合ということを目指すのであれば、同じ主題について異なる立場から論じるような構成のほうがよかったかもしれない。もちろんこれはないものねだりであって、これが本書の価値を損ねるわけではない。本書は体系的ではないかもしれないが、編者のいうとおり、「興味のあるところから読み進め」ことができ、幅広い読者にとって有益な情報を含んでいる。

座談会で「シカはどこも共通していて、かなり大きな問題になってきています」とされるシカについては、記述が章間で矛盾しているように思えた。第2章では、考古学化石に基づき、完新世以降の日本ではシカがもっとも重要な狩猟獣であり、肉の利用だけでなく皮や骨角器の資源としても重要であったことが主張される。豊臣期頃から骨角器の材料としてシカにかわり牛馬骨が主流になることは、シカ資源の枯渇として解釈される。それに対し第7章では、生態学的な考察から「もともとシカは多かった」、「過去、各地に多くのシカが生息していた」ことが主張される。

今何をなすべきかは歴史から学ぶ必要がある、と先に書いたが、歴史は不完全にしか知りえないことに注意すべきだろう。自然保護・野生生物管理・自然再生などにおいて、守るべき、維持すべき、あるいは再生すべき「本来の自然」とは何なのか？自然は過去も常に変動してきたので、たった一つの答えがあるわけではない。自然科学・人文科学の手法に基づき歴史を解明する努力は重要だが、「本来の過去」についてもたった一つの答えがあるわけではない。本書によって明らかにされた歴史も、あくまでそれぞれの視点から見たある時点までの過去であって、それより以前にさかのぼればまた違った過去があるかもしれない。たった一つの「本来の自然」や「本来の過去」が存在しないのであれば、今何をなすべきかは歴史に学びつつも、究極的には現代を生きる私たちの価値観に基づいて決めていくしかないのだろう。

今何をなすべきかは歴史だけでなく、現状分析にも基づく必要がある。第10章は、イノシシの行動・痕跡調査に基づき現代の獣害問題に取り組んでおり、生態学の有効性を示すよい事例になっていると感じた。

(鹿児島大学理学部地球環境科学科 相場慎一郎)

鷲谷いづみ・宮下直・西廣淳・角谷拓編 (2010) 「保全生態学の技法 調査・研究・実践マニュアル」 東京大学出版会 330pp. ISBN: 978-4-13-062219-6

自然環境問題が台頭するにつれ、国内外で保全生物学という分野が注目されるようになった。例えば、Conservation Biology を始め、Diversity and Distributions

や Conservation Genetics 等、多数の保全生物学分野の雑誌が相次いで出版され脚光を浴びるようになったのも、そんなに遠い昔の話ではない。保全生物学や保全遺伝学等のタイトルを冠した書籍が海外で出版され、最近ではその日本語訳版もいくつが出されている。これらに加え、本書の著者らも指摘しているとおり、「保全生態学入門—遺伝子から景観まで」(鷲谷いづみ・矢原徹一 著)は保全生態学を国内で普及させるのに大きな役割を担った。

これだけ急速な発展を遂げ脚光を浴びている保全生物学の世界に足を踏み入れて、学術的にも、又、応用的にも意義の高い成果を出したいと思う研究者は多いだろう。では、その研究を進めるために欠かせない、様々な調査・研究技術を習得するにはどうしたら良いのか。勿論、大学であれば同じ研究室や専攻の教員や先輩方に教わるというやり方もあるが、現在のように多様化・高度化している技術を全て上記のやり方で習得するのは困難だろう。研究の目的を達成する上で、自分の周りの誰しもが経験したことのない調査・研究方法を、どうしても独学で身に付け、利用しなくてはならない場合もあるのではないだろうか。このような場面では、様々な調査・研究の技術・方法をマニュアル化したものがとても役に立つ。そんな要望に応じてくれるのが、今回紹介する「保全生態学の技法 調査・研究・実践マニュアル」である。

本書は、第I部(第1~4章)に「種内の多様性の評価と保全」、第II部(第5~8章)に「種・個体群の評価と保全」、第III部(第9~14章)に「群集・生態系の評価と保全・再生」というタイトルをあてた3部構成となっている。但し、内容的につながりがある章同士が異なる部に分かれて記載されている場合もあり、この3部構成は必ずしも厳格な仕切りにはなっていないようだ。

以下、章の順番にはこだわらず、トピック毎に簡単に内容を紹介しよう。第1章・第14章は、土壌シードバンクを活用した自然再生(植生復元)のために役立つ技法・考え方を示している。第2章でも同様に、植物の保全上重要となる、適切な光環境の評価・確保の手法について紹介されている。第3章では、植物の保全の観点から有用な遺伝学的手法(近交弱勢の推定法や個体の起源特定の方法等)を示している。続く第4章も遺伝学的手法を用いて外来種による遺伝的攪乱の検出方法について魚類を材料に解説しているが、第8章ではさらに外来魚等の駆除方法について紹介しており、両章を読むことで、外来魚に関する基礎的研究と実際の対策の双方を俯瞰することができる。第5章からは少し視るスケールが大きくなる。即ち、ホットスポットや希少種分布域の特定から自然保護区の設定等にまで活用できる、生物の地理的分布情報等の取り扱い方を紹介したのが第5章である。そして、第6章で言及されているエコロジカルニッチモデリングのような手法も理解・習得できれば、パソコン上での様々な種の分布情報の取得、それに基づく分布域と環境条件の関係の解明、さらに過去・未来の分布域の推定等が容易にできるようになる。この点では、第12章で紹介されているリモートセンシングによる植生評価法も、やはり植物種の分布域の特定や植生図作成等に活

用できるのではないだろうか。他方、分布域に対して個体数の推定について、とくに全国長期モニタリング調査のデータに基づく方法を紹介したのが第7章である。第9章では、安定同位体を利用した食物網構造や栄養段階を明らかにする手法について、淡水域における研究例を材料に紹介している。これは、第4章と並んで、外来魚による生態系に対する影響を解明する上では、有用な手法の一例と思われる。最後に残った第10、11及び13章は、生態系を保全・復元するために直接的に関わる話というよりは、その隣接領域（環境保全型農業のための生態学）や間接的に役立つ手法（水文学、古生態学の手法）を紹介している。研究の幅やオリジナリティーを上げるにあたって、これらの章が提供してくれる話題は参考になるだろう。

上記のとおり、本書は保全生態学や保全遺伝学の調査・研究にあたって必要となる手法をくまなく網羅的に解説している訳ではない。寧ろ、各章の著者が自ら手がけてきた研究を実例として、そこで扱ってきた調査・研究の手法や見方をオムニバスの綴っているという印象を受ける。従って、自分の研究にさしあたって必要となる特定の章だけを読む“マニュアル的”な使い方もできるだろうが、一冊を読み通すことにより、保全生物学の研究トレンドを俯瞰する“総説的”な使い方も考えられるだろう。言い換えれば、本書を通読することで保全生態学の研究の進め方を垣間見ることができ、結果として本書で紹介されていない手法や話題についても、よりスムーズに習得・理解したり、或いは自ら新しい手法の開発をするといったことにも役立てられるだろう。そしてまた、どの著者も、個々の研究手法が生態系の保全・復元にあたってどうして重要なのか、どんな形で役立つのかを詳述している。これらの点に、本書の特徴と意義があると考えられる。

(大澤隆文)

坪田敏男・山崎晃司編著 (2011) 「日本のクマ、ヒグマとツキノワグマの生物学」 東京大学出版会 370pp. ISBN 978-4-13-060220-4 定価 5800 円

最近、日本のクマに関する興味深い書籍が次々と出版されている。例えば、「ヒグマ学入門」(天野他編著、北海道大学出版会、2006)、「ツキノワグマ」(大井徹著、東海大学出版会、2009)、「ヒグマとつきあう」(ヒグマの会編、エコ・ネットワーク発売、2010)などがあげられる。このことは日本のクマ類の研究の進行度や社会的認知が成熟期に達した一つの現れであろう。

さて、本書は、日本にいるクマ類、つまり北海道にいるヒグマと、本州、四国（とかつては九州）にいるツキノワグマの最前線の研究者17名による共同執筆となっている。本書は序章と3部構成に分かれた合計12章の本章と4つのトピックからなっている。第1部は「ヒグマ」についての3章と1つのトピック、第2部は「ツキノワグマ」についての4章と1つのトピック、第3部は「ヒトとクマの共存」についての5章と2つのトピックから構成されている。

私も二十数年前にヒグマの研究に少しだけ顔をつっこんでいた時期もあった。当時はクマ類についての日本人による本といえば、非自然科学のものか、逸話集のような本がほとんどであった。また私の若い頃はクマをはじめとする大型獣は、生態学・生物学的研究に向いていない対象であると批判されたものだ。当時の日本の生態学界での冷たい視線にもかかわらず、情熱をもって研究を続けてきたクマ類の研究者に敬意を表したい。また扱っているサンプル・サイズもツキノワグマでは遺伝的解析や安定同位体分析、行動圏調査などでは、小型獣を使った研究よりも多いぐらいであり、研究者の努力のみならず、クマ類調査に対する社会の理解と協力も高まっていることを感じた。本書のような学術的論議に耐えうるクマ類についての書物がでるようになり感無量である。またぞろ、私もクマ類研究に関して興味がわいてきた。ただ、欲を言えば、日本のクマ類研究は未だに欧米の研究の後付け的な研究が多く、もっとオリジナリティーの高い研究を進めたらよいのではと思った。また、クマ類の生態学的研究にDNA分析、安定同位体分析や高性能の電波発信機やGPS付データロガー、航空機などを使うなど、最先端技術と大がかりな調査が日本でも行われるようになったことにも時代の流れを感じた。本書の編者の一人の山崎氏も第4章で同様のことを述べているが、クマ研究者、特に若手、は技術的進歩に目を奪われるだけではなく、「何をするか」「何が疑問なのか」といった原点を忘れずに研究を進めて頂きたい。もっと頑張れ！日本の若手クマ研究者よ。

本書の内容については私の興味あるところのみ少々コメントをしたいと思う。書評者一押し章は、編者の一人の坪田氏による序章「クマの生物学」である。この章の中でも特に、クマ類の冬眠と繁殖についての最新の研究成果のレビューが最も興味深かった。温帯や寒冷地のクマ類は雄雌共に多くの個体が冬眠し、妊娠雌は冬眠中に出産を行う。一方、極北のホッキョクグマや熱帯のツキノワグマでは妊娠雌のみ冬眠をする（雄や非妊娠雌は冬眠しない）。つまり冬眠と繁殖生理の進化はお互いに深く結びついていることがわかる。また、冬期にも給餌されている飼育ヒグマやツキノワグマは冬眠しないということは、栄養状態も冬眠開始の至近要因として重要であることを示している。さらにクロクマとホッキョクグマでは少々異なる冬眠の生理メカニズムも持っているため、クマ科内での冬眠の進化過程を調べる必要がある。クマ類における冬眠と繁殖との関係は生態学・進化学的課題としても将来性のあるテーマではないだろうか。今後、冬眠の至近要因と究極要因を生理学、生態学、進化の各レベルで、クマ類の進化過程を考慮して詳細に調査することが望まれよう。

つぎに、第6章の大西尚樹氏のツキノワグマの遺伝解析の研究例であるが、圧倒的多数の検体数と調査地域が用いられていることに感心した。彼はこの研究結果に基づきツキノワグマの生物地理学と保全生態学の問題に対する仮説を提起している。しかし、核の遺伝子の使用や別の解析法により異なった系統関係や集団遺伝学の結果が得られる可能性があり、再分析の余地がある。第3章

の釣賀一二三氏によるヒグマの遺伝解析についても同様に再解析・分析の余地は十分にある。本書で書かれたことはまだ今の時点での仮説の一つと捉えるべきである。また、中下留美子氏の安定同位体の分析による食性分析のトピックも将来性のある研究である。彼女の研究例ではヘア・トラップによる分析、つまり中程度の過去における食物の分析、が主であるが、今後は血液などを用いた最近の食物利用の推定を進めることや、考古学的試料をふくむ骨等の分析で食性の時代的変遷の研究なども可能になると、さらに研究の奥が深まるであろう。

第3節では最前線のクマ類の保全の研究や被害対策の紹介と奮闘ぶりを伝えている。人間の生命、財産が関わるこれらの問題に真摯に取り組んでいる方々には頭が下がる思いである。彼らはさぞかし胃が痛い毎日をおくっているにちがいない。大井徹氏の「保全問題は思索の問題ではない」（第8章）との言説に関して私は基本的に同意する。しかし、形而下である具体的対策だけを行うのであれば「研究者」ではなく、「技術者」を称すればよいのではないか？ 仮にある人が研究者を標榜するならば、思索無くして研究行為はあり得ないというのが私の持論である（もっとも技術者としての道を究めたいなら、それはそれで結構である）。私は多くの機会に保全研究に対して辛口の意見を言っているが、アンチ保全論者などでは決してない。健全な保全学研究を進めて欲しいがために余計な口だしをしたくなるのである（「素人がなを偉そうに、、、まさにお節介だ」と苦笑されている方もおろうが）。保全問題は根本的には生物学的問題ではなく社会学的問題である。生態学者として保全問題に取り組む場合は、それはあくまで生態学的技術面についてであり、それは形而下学である応用科学（保全生物学）に属する。一方、保全生物学を包括すべきメタ保全学は、形而上学的な問題であり自然科学と社会科学の学際領域に位置する立派なサイエンスである。サイエンスである以上、哲学的思索は不可欠である。また「おわりに」で編者の山崎氏が、社会的問題を引き起こすクマ類の研究者は好むと好まないに関わらずその被害防除や保全に関わらざるを得なくなる状況を説明している。そこで彼も指摘しているが、これらの対策例や研究例はピア・レビューのある「科学的」な雑誌に載ることは少ない。このことは確かにサイエンスとして問題有りであろう。彼らにとって被害や保全に対する対策を講じることが第一義かも知れないが、これだけのデータが揃ってきているのだから、今後は保全や被害対策研究者もきちんとした雑誌に論文を投稿して、日本の大型獣の保護管理研究のレベルアップとサイエンスとしての発展に努めるべきかと思う。

最後に、些細な誤謬を指摘する。本書では北海道産のヒグマの亜種名を *Ursus arctos yesoensis* Lydekker 1897 としているが（p.2 初出、命名者と年は書評者が補足）、これは *U. a. ferox* Temminck, 1844 の新参異名であると思われる（Baryshnikov et al. 2004; Russian Journal of Theriology 3: 77-88）。つまり前者の亜種名は無効ということである。Baryshnikov et al. (2004) のこの指摘は妥当と思えるが、*U. a. yesoensis* は多くの研究者もよって

長らく使用されてきたので、クマ研究者は原記載を動物命名規約に則って吟味して、この指摘が正しいのか再確認されたい。この他に p.2. の *Vulnelable* は *Vulnerable* のミスペルなど細かい点がいくつかあった。

本書はクマ類研究者には必需本であるが、哺乳類を扱っていない生態学徒にも決して損はない本であるので余裕があれば買ってほしい。しかし価格が 5800 円は確かに高い。学生がおいそれと手を出せる額ではない。この本の出版社の担当編集者である光明氏の話しでは、この額は編者や出版社の本意ではなく、経営上、致し方なくこの額になったそうである。光明氏の言葉を借りれば現在は本の「価格破壊」の時代に突入し、出版業界は存続の危機に瀕しているという。安易に情報が手に入るインターネット時代だからこそ、紙媒体の情報の重要性を考え、それを支えていくことも肝要であろう。

（北海道大学低温科学研究所 大館智志）





## 京都大学 生態学研究センター

Center for Ecological Research  
Kyoto University

京都大学生態学研究センター  
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3  
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201  
センター長 椿 宜高

Center for Ecological Research, Kyoto University  
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,  
520-2113, Japan  
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

### 2011 (平成 23) 年度 センター活動予定

生態学研究センターにおける 2011 年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

#### 1. プロジェクト

2007 年度から始まったグローバル COE 「生物の多様性と進化研究のための拠点形成—ゲノムから生態系まで—」(研究代表者: 阿形清和) (文部科学省研究拠点形成費補助金)、2008 年度から始まった「生物多様性を促進する生物間相互作用ネットワーク—ゲノムから生態系まで—」(研究代表者: 高林純示) (日本学術振興会先端拠点事業—拠点形成型—)、2010 年度から始まった「遺伝子発現の季節解析にもとづく植物気候適応の機能解明と予測技術開発」(研究代表者: 工藤 洋) (総合科学技術会議最先端次世代研究開発プログラム) などの大型共同研究が進められている。また、流動連携機関である総合地球環境学研究所との 2 つの共同企画プロジェクト、地球環境研究総合推進費による共同研究 (3 件)、科学研究費補助金による研究 (28 件)、科学技術振興機構の受託研究 (1 件) も進められている。

#### 2. 協力研究員

引き続き、協力研究員 (Affiliated Scientist) を公募する。

#### 3. 共同利用・共同研究事業

2011 年度共同利用・共同研究事業として、分野間の交

流や若手研究者の育成の観点から、4 件の共同研究、1 件の研究集会、2 件のワークショップが採択された。開催の日程などの詳細は、センターホームページに掲載する。

#### 4. 生態研セミナー

前年度に引き続き、月一回程度 (第三金曜日) センター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催する。場所は京都大学生態学研究センター第二講義室 (会場への道順は、センターのホームページ参照) の予定である。

#### 5. ニュースレターの発行

センターニュースは、印刷物として年に 3 回 (7 月、11 月、3 月) 発行する予定である。また、その内容は、センターのホームページでも公開する。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

#### 6. オープンキャンパス、公開授業

日本学術振興会受託研究「ひらめきときめきサイエンス」、一般公開「学校で習わない生き物の不思議」の開催を予定している。

#### 7. 共同利用施設

大型分析機器: DNA 関係では DNA 多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係では、水の酸素・水素同位体比分析前処理装置 (水平衡装置) と GC/C (ガスクロ燃焼装置付き前処理装置) を装備した安定同位体比質量分析計 MAT252 と、炭素・

窒素同位体比オンライン自動分析装置（元素分析計）を装備した安定同位体比質量分析計 delta S、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置（元素分析計）、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置（熱分解型元素分析計）、GC/C（ガスクロ燃焼装置付き前処理装置）、LC/C（高速液体クロマトグラフ付き前処理装置）を装備した安定同位体比質量分析計 delta V の計 3 台。

琵琶湖観測船：高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼働しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地（下阪本）に係留されている。

シンバイオトロン：ズートロン、アクアトロン、水域モジュールが稼働している。

実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹植栽林園、林木群集実験植物園、CER の森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に担当者に連絡してください。

DNA シークエンサー等関係：工藤

安定同位体関係：陀安

観測船関係：小坂橋

シンバイオトロン関係：奥田

実験圃場林園関係：大園

## 8. 協議委員会、運営委員会、共同利用運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

### 平成 23 年度 共同研究・研究集会・WS 採択申請一覧

| 申請者  | 所属             | 申込内容    | 研究課題   |
|------|----------------|---------|--|
| 谷 誠  | 京都大学農学研究科      | 共同研究 a  | 日本全国における地下水の酸素・水素安定同位体比分布の解析   |
| 市栄智明 | 高知大学教育研究部自然科学系 | 共同研究 a  | 放射性炭素分析法を用いた樹木の結実豊凶と資源貯蔵との関係性の解明   |
| 大手信人 | 東京大学農学生命科学研究科  | 共同研究 a  | 安定同位体比情報を用いた森林土壌中の NO <sub>3</sub> の分布と起源の把握とモデル化  |
| 横沢正幸 | 農業環境技術研究所      | 共同研究 a  | 陸域生態系機能の環境変動応答機構の解明に向けたデータ同化法の利用   |
| 山内 淳 | 生態学研究センター      | 研究集会    | 3rd Taiwan-Japan Ecological workshop for Quantitative Ecology 2011 -Linking theory to reality- |
| 陀安一郎 | 生態学研究センター      | ワークショップ | 安定同位体ワークショップ 2011  |
| 奥田 昇 | 生態学研究センター      | ワークショップ | 若手研究者のための夏季観測プログラム in 琵琶湖  |

## セ ン タ ー 関 係 者 の 動 き

- 1) 2011 年度外国人研究員（客員教授）の Karol MARHOLD 氏が 6 月 30 日で任期を終え、帰国されました。
- 2) 2011 年度外国人研究員（客員准教授）の Stewart Jhon PLAISTOW 氏が 8 月 31 日で任期を終え、帰国されました。
- 3) 米谷衣代氏が、6 月 1 日付けで研究員（研究機関）として採用されました。



## ◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。  
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。  
下記会費および地区会費の合計を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

退会する際は前年度内に退会届を事務局まで提出してください（ウェブサイトにて申込フォーム有り）。  
会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

### 会員の区分と個人会員の権利・会費

|                    |                           | A 会員   | B 会員   | C 会員   |
|--------------------|---------------------------|--------|--------|--------|
| 配布 *               | Ecological Research + 生態誌 | ○      | ○      |        |
|                    | 保全誌                       |        | ○      | ○      |
| 投稿 **              | 生態誌                       | ○      | ○      |        |
|                    | 保全誌                       | ○      | ○      | ○      |
| 大会発表               | 全セッション                    | ○      | ○      |        |
|                    | 自由集会                      | ○      | ○      | ○      |
| 総会・委員<br>(選挙・被選挙権) |                           | ○      | ○      | ○      |
| 年会費 ***            | 正会員 (一般会員)                | 11,000 | 13,000 | 5,000  |
|                    | 正会員 (学生会員)                | 8,000  | 10,000 | 2,500  |
|                    | 団体会員                      | 20,000 | 22,000 | 14,000 |

\*Ecological Research および生態誌については冊子を必要としない会員への割引(ER 900 円、生態誌 600 円)を行っています。すでに会員の方が今後申請される場合は2012年度以降の適用となります。新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年度より適用されます。

\*\*Ecological Research への投稿権利は従来通り会員に限定しません。

\*\*\* 生態学会では収入の少ない若手一般会員のために、学会費を学生会員と同額にする措置を実施します。詳細はウェブサイトをご覧ください。

### 地区会費

正会員は、住所(所属機関か自宅のうち、郵送物の配布先となっているほう)により、地区会に参加することになっています。各地区会ではそれぞれ独自に地区会費を定めています。学会費の納入時には、これらも含めて請求しますので、あらかじめご了承ください。

- ・北海道地区 (200 円)：北海道
- ・東北地区 (800 円)：青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県
- ・関東地区 (600 円)：茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県
- ・中部地区 (0 円)：長野県・新潟県・富山県・石川県・福井県・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県
- ・近畿地区 (400 円)：滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
- ・中・四国地区 (400 円)：鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県・徳島県・香川県・愛媛県・高知県
- ・九州地区 (700 円)：福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8

Tel&Fax 075-384-0250

<http://www.esj.ne.jp/>

※ お問い合わせはウェブサイトからお願い致します。